

## 論文の内容の要旨

論文題目：現代トルコにおける政治的変遷と政党-1938~2007-  
—政治エリートの実証分析の視点から—

氏名：宮下 陽子

本論文は、政治エリートのキャリア変遷を通じて、現代トルコにおけるナショナリズム政党の消長、中道右派勢力の躍進と退潮、そしてイスラーム系政党の躍進といった一連の政治的変遷を構造的にとらえることを目的とするものである。

現代トルコ政治研究は、一方では、専ら政治イデオロギー研究または有権者の投票行動研究の観点から行われてきた。しかし、前者では西欧諸国で流布しているイデオロギーとの比較が専ら行われる印象が否めず、後者では有権者に選ばれる政党が固定的に扱われ、政党の所属者に関する論議もなされていない。他方で、議会制民主主義が一応機能しているトルコを統治する、政治エリートとしての国会議員の変遷の分析から共和国の権力構造の分析を試みる国会議員研究がある。フライに始まるこの研究では、1923年の建国から1946年複数政党制への移行による議会での野党の誕生と、1950年総選挙結果による与野党の逆転の過程の中で、軍人と官僚といった国家エリート出身議員に替わり、民間出身の議員が台頭し始めたこと、1960年クーデタの後61年から80年まで続いた第二共和制下での民間出身議員の増加傾向が見られることが明らかとされた。これらの研究は議員の学歴、職歴等を綿密に調べた実証的なものであるが、総選挙結果や議員の経歴データに基づく事実の整理に留まり、国内の政治変化と絡めた考察が不十分と言える。何より、政党別に議員の分析がなされず、国政を左右する内閣の閣僚の分析も行われていないため、議員の変化が1政党のみか、政党横断的か、その変化が閣僚にも及んだのかが論じられていない。更に、1980年クーデタを経て83年から今日まで続く第三共和制下での政治エリート研究は、1983年総選挙での当選議員を扱ったタショーの研究を最後としているため、第一共和制期から第二共和制期にかけて進行した政治エリートの経歴傾向の変化が、第三共和

制期でも見られるのか否かが不明である。

建国以来トルコを統治してきた世俗主義的ナショナリズム政党である共和人民党(CHP)が、複数政党制導入以降退潮し、とりわけ 1960 年代後半以降イデオロギー的にも中道左派化した。入れ替わるように支持を拡大してきたのが中道右派政党である。それは、1950 年以降は民主党(DP)、第二共和制期には公正党(AP)、そして第三共和制期は母国党(ANAP)と正道党(DYP)が与党の座を占めたことから明らかである。しかし、第二共和制期の 1970 年に成立したが長らく広範な支持を獲得しえなかったイスラーム系政党が、近年支持を拡大している。1990 年代には繁栄党(RP)が支持を集め 96 年には連立政権の首班となり、後継政党を経て 2002 年以降は公正発展党(AKP)が単独与党となった。このようにイスラーム政党の躍進現象が 21 世紀のトルコでは顕著であり、世俗主義の堅持を主張する軍との軋轢が生じている。他方で、極右民族主義政党として認識されてきた民族主義者行動党(MHP)も近年イデオロギーの穏健化と共に支持を拡大している。

このように、近年トルコの政治状況は急速に変化しており、従来のイデオロギー分析や有権者の投票行動分析だけではその実態を捉えることは難しい。本稿では政党をイデオロギー要素のみによらず考察するため、国会議員を政治エリートとして捉える。「政治エリート」の構成とそのリクルートシステムは政治体制を構成する重要要素の 1 つと言えるからである。

国会議員を「政治エリート」と定義すると共に閣僚や政党幹部を「トップ・エリート」とする本論文では、先行研究と異なりトップ・エリートを別個に考察の対象とする。更に、政党別にも政治エリートの経歴を検討することで、政権交代の枠組みにとらわれずに政治的変遷を考察する。また、政党を支持するだけでなく政治エリートの人材プールともなっている労働組合や知識人団体といった党の支持団体も扱う。

活用する主な資料は、新聞及び雑誌記事、党幹部の名簿を含む政党の出版物、政治家の回想録及びインタビュー、そして議員の詳しい経歴が記載される、トルコ国会が会期毎に発行する「トルコ大国民議会名鑑」である。

第一部では 1946 年の複数政党制の導入から 1980 年の軍事クーデタにより第二共和制が終焉するまでを扱い、第二部では 1983 年から今日まで続く第三共和制期を扱う。

第一部では、まず第一章で第一及び第二共和制下で基調をなした、共和国全体におけるトルコ・ナショナリズムの潮流とその変化を CHP と MHP を中心に検討する。そして、1965 年の CHP の中道左派宣言が、ナショナリズム政党から中道左派政党への党のイデオロギーのみならず、党幹部会における官僚出身者の減少とジャーナリスト出身者や労組出身者、弁護士出身者の増加に代表される経歴の多様化という党エリートの質をも変化させたこと、MHP も支持層拡大のためにイスラームを重視し始めたことを実証した。第二章では 1938 年に初代大統領アタチュルクの死去後、第 2 代大統領となったイノニユが 46 年に複数政党制を導入するまでの期間における CHP の政治エリートとトップ・エリートを、第三章では与野党の逆転後、1950 年から 10 年続いた DP 政権下での政治エリートと CHP と DP のトップ・エリートを、第四章では 1961 年から 80 年にかけて AP と CHP の 2 大政党制が機能した第二共和制下での政治エリートと CHP と AP のトップ・エリートを、先行研究も参照しつつ分析した。以上より第一部では複数政党制の導入は単なる与野党の逆転現象に留まらず、トルコ・ナショナリズム自体を変質させ、CHP のトップ・エリート

の経歴傾向も変化させたことを実証する。更に、第二共和制下でのトップ・エリートの選抜は政党を問わず党首との個人的関係に拠っており、そのベースは同窓や同職であったことを示す。

第二部では、民間出身者と宗教関係出身者の比率に主に着目する。第五章でまず 1983 年から 96 年までトルコで幅広い支持をアツめた ANAP と、AP の流れを組む DYP の政治エリートとトップ・エリートを考察する。この際、83 年から急死する 93 年まで首相と大統領を歴任したオザルを軸に据える。この章では、トルコにおける中道右派政党の特徴の 1 つは、民間出身者が政治エリートの中で過半数を占めたことであるということを実証する。更に、オザル以降トップ・エリートの抜擢において、従来に加え更に党首との個人的関係が重視され、それは DYP の党首チルレルにも見られることを示す。第六章では第二共和制下でのナショナリズム政党である CHP と MHP の政治エリートとトップ・エリートを検討する。第二共和制下における性質を党が保持していたか否を確認するのが目的であり、CHP においてはイデオロギー的には中道左派政党の流れが固定化し、MHP では党首の交代後穏健化路線を採用する一方で人材も党首との個人的関係に拠って一新したことが示された。第七章では 1991 年以降のイスラーム系政党の政治エリートとトップ・エリートを考察する。イスラームを前面に出したエルバカンの政党から、AKP を民主的で世俗主義の体制を守る「保守民主主義」の党であると定義したエルドアンの党への変化が、イスラーム系政党の政治エリートやトップ・エリートの構成員に変化を与えたのかを検討する。第二部では、民間出身者によって構成されてきた第三共和制下での政治エリートの流れは、ANAP から DYP への政権交代、イスラーム系政党の伸長といった政治変動が起こったにも拘わらず、議員や閣僚も含めた経歴傾向からは非常に安定していることが示された。

AKP はイデオロギー的变化に留まらず、政治エリートそしてトップ・エリートにおいてもその前身政党と全く異なる顔ぶれに変化した。しかし、その姿は、イスラーム系政党の流れを汲みつつも、ANAP や DYP、さらに言えば DP や AP にも遡る現代トルコの中道右派政党を彷彿とさせる。言説や支持層においてはイスラーム系政党の伝統を継ぎつつ、政治エリートの顔ぶれは中道右派政党の特徴を取り入れている。更に、トップ・エリートの人材のリクルートメントはオザル以来の「党首との個人的関係」という、DYP や MHP と同種のパターンを採っている。しかし、その際基準とされるのは従来見られた学閥や血縁ではなく、AKP においては党首エルドアンとトップ・エリートとの個人的関係が基礎をなす。このように、AKP は、トルコ政治において全く新しいタイプの政党と考えることが出来るのである。

以上より、第二共和制と第三共和制の間には民間出身者の増加に見られる経歴の多様化という特徴が見られる。しかし、第三共和制下では、幾多の政権交代やイスラーム政党の伸長と認識される事象はあるものの、政治エリートにおいては共通の傾向が見られ、トップ・エリートの選抜においては、党首との個人的関係がより顕著になったと言える。従って、現 AKP 政権も、1983 年から 90 年代半ばまで与党であった ANAP から DYP に連なる中道右派勢力の流れにも繋がると考えることが出来るだろう。MHP の中道化も併せて考えると、現代トルコ政治においては中道化が進行していると捉えられるのである。